

参加費
無料

※ただし、通信料等は
自己負担となります

里山資本主義

幸せの経済と私達の未来

「日本の資本主義の父」と呼ばれる澁澤栄一さんの著書「論語と算盤」にはSDGsの考え方が既に記されていたといわれています。かつて日本の経済社会の発展を支えた里地里山※は、特有の生物の生息・生育環境として、また、食料や木材など自然資源の供給、良好な景観、文化の伝承の観点からも重要な地域で、農林業などに伴うさまざまな人間の働きかけを通じて自然環境が形成・維持されてきました。

SDGsが目指す人間の幸せとは何かを考え、日本人がこれまで歩んできた生き方、コロナ禍で再評価される自然と人間の協働による永続的な地域社会「里山資本主義」とは何か、地球環境保全の持続可能性と私達が目指している方向性を考えます。

※里地里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域

講師 NPO法人「樹木・環境ネットワーク協会」顧問
NPO法人「共存の森ネットワーク」理事長 農学博士
澁澤寿一先生



講師略歴

1952年生まれ。国際協力事業団専門家としてパラグアイに赴任後、長崎オランダ村、ハウステンボスの企画、経営に携わる。NPO法人共存の森ネットワーク理事長。全国の高校生100人が「森や海・川の名人」をたずねる「聞き書き甲子園」の事業や、東京都環境局と連携した「きく・かく・えがく〜東京のふるさと・自然公園」を主催。また、都市部の若者が地域との交流・定住を目指す「なりわい塾」など、森林文化の教育、啓発を通して、人材の育成や地域づくりを手がける。岡山県真庭市では木質バイオマスを利用した地域づくり「里山資本主義」の推進に努める。明治の実業家・澁澤栄一の曾孫。農学博士。



日程 令和3年**11月6日(土)** 13:30~15:00

実施方法 **Zoomによるオンライン開催**

募集人数 **定員なし**

申込方法・申込期限

東京都環境公社ホームページ
(<https://www.tokyokankyo.jp/>)

「イベント・セミナー情報」からお申込みください

申込期限 令和3年11月6日(土)正午



主催：東京都環境局 実施：公益財団法人 東京都環境公社
【お問合せ】公益財団法人 東京都環境公社 総務部経営企画課 SDGs推進室
TEL 03-3644-2166 E-mail renkei@tokyokankyo.jp

「里山資本主義 幸せの経済と私達の未来」

- 実施日時 令和3年11月6日(土)
13時30分～15時00分
- 実施方法 Zoomを使用したオンライン開催
- 受講者数 定員なし 受講申込者数198名
見逃し配信申込者数38名



□実施内容

- 「里山資本主義 幸せの経済と私達の未来」
(講師) NPO 法人 共存の森ネットワーク 澁澤 寿一氏

●江戸の社会

- ・自然共生型社会、使用するエネルギーはすべて自然のエネルギーで賄われていた。
- ・循環型社会、人間の排泄物を土壌に戻す循環系ができていた。
- ・江戸の持っていた系は持続可能な系であったと言える。
- ・江戸の循環の仕組みは少なくとも60年前までは機能していた。
- ・江戸時代の日本は労働者階級の人でも「自分の責任」という概念を持っていた。

●栄一の考えた資本主義

- ・経済というシステムができることでみんなが平等になると考え資本主義という考えを持ち込んだ。
- ・「資本主義」という言葉を使ったことはなく「合本主義」という言葉を使っていた。
- ・「合本主義」は、人と人が集まって新たなことを実施することが理想。

●暴走をはじめた資本主義

- ・お金がお金を生むようになりバーチャルなお金が増え実体経済の70~100倍の金融資本が誕生した。
- ・現在は1000倍近いとも言われている。
- ・ある意味では何のために働くのか見えなくなった。



栄一の考えた資本主義

- ・ 士農工商への反感。
経済の世界では、**皆が平等** (栄一の考えた、社会のあるべき姿)
- ・ 合理的に民間の富を国造り(富国強兵、将来づくり)に向ける
- ・ 「信用」と「責任」こそが経済の原質
「高利貸し」から「バンカー」の誕生 → 「金銭」の調達から「信用」の調達に
「信用」とは、未来社会のビジョンの「共有」と「実践」「責任」(論語と算盤)
- ・ 孫・敬三(日銀総裁、大蔵大臣など歴任)の不安
「爺さんが資本主義という、とんでもないものを、この国に持ち込んだ。」

暴走をはじめた資本主義
(1990年以降のグローバル経済)

コミュニケーションの道具としての「お金」、世界中で通用する、公平で共通な「道具」

↓

公平だが限度がない(欲望の抑制が効かない)
バーチャルな貨幣(株、為替差益、債券...)の増加・パソコンの普及
ウォール街経済(貨幣が貨幣を生む仕組み、リスクの証券化)
実体経済の70~100倍のバーチャルマネー

↓

地球は有限、70億の人口の生存を貨幣は担保できるか?
「いのち」や「持続可能性」を「お金」で保障できるか?
そもそも、エコロジー(自然)あつての、エコノミー(経済)

↓

世界の富の50%以上を1%の人が持つ(トランプ現象・不公平感)

●江戸期から約150年

- ・「科学」と「経済」は発展した。一方で「社会」と「人間」は発展したのだろうか。
- ・発展とは一人一人が幸せになることだと思う。
- ・「幸せな」かつ「地球が持続していく」社会をどう作るのか。人類の曲がり角に来ている。

江戸期から約150年、
 「科学」と「経済」は発展したが、
 「社会」や「人間」は発展したのか？
 発展とは、**幸せ**をつくるもの。
 持続可能な発展とは・・・

●聞き書き甲子園

- ・全国の高校生100人が日本の自然の中で生きてきたおじいちゃんおばあちゃんの人生を聞き書きするという活動で現在までで20年間実施している。累計では約2000人の記録が残った。
- ・マタギのおじいちゃんは山さえあれば生きていけると言う。マタギとは職業ではなく生き方。
- ・子どもたちは大人になるということは職業に就くことだと思っている。学校の先生もそのように教える。おじいちゃんと先生のどちらの意見が正しいか戸惑う。



聞き書き甲子園
2002年～現在

●時代の転換点

- ・日本が大きく変わった時期は前の東京オリンピック前後の5年間。
- ・それまでは「生きる」＝「働く」であり自分から動かなければ生きていけなかった。それは何万年と続いてきた暮らし方であったが機械に頼る暮らしに変化した。
- ・全世界の人間が現代の日本人と同じ暮らしをするには地球3個分のエネルギーが必要。
- ・それまでは次の世代に思いをつなげる考え方があったが現在では自分らしく生きることが重要視されている。

時代の転換点		
70代以上 戦中・戦前生まれ 数万年続いた	60代～40代 高度経済成長期 ～バブル期 1960(S35)～1965(S40)	10代後半から20代 バブル以降 60年の実績
農村中心(生きる=働く)	←→	都会中心(お金の社会)
自給自足	←→	冷凍食品・レトルト
薪や炭	←→	石油・ガス・原子力
体を使って働く	←→	電化製品・パソコン
歩く・馬や牛	←→	自動車・新幹線
伝統的な知恵や技	←→	情報化社会
自然の厳しさ、豊かさ	←→	公害問題・地球温暖化

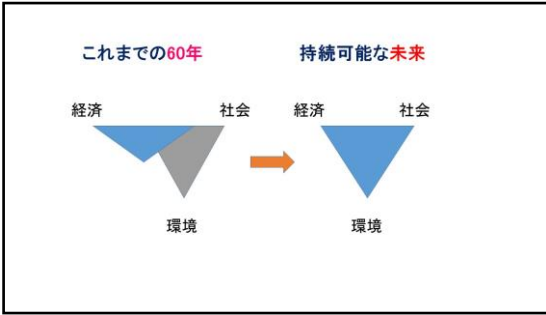
●SDGs

- ・強大な生態系のバランスが今まさに崩れようとしている。
- ・マングローブを復元する仕事の隣でエビを養殖する仕事によってマングローブが伐採されている。
- ・エビの輸入商社の目線ではSDGs目標の達成に貢献できている。一方でマングローブの破壊により悪影響を及ぼしている。
- ・誰も悪くないということが一番の問題。

我々は、貧困と不平等を終わらせる**最初の世代**になりえる。
 同様に、地球を救う機会を持つ**最後の世代**にもなりえる。
 (2030年まで人類滅亡への引き返せない最終点を越える)
「経済・社会・環境」の調和により、我々の世界を変革する！

●経済と社会と環境の調和

- ・経済が豊かになることが幸せだと思われてきたがその一方で社会が歪になり、環境が破壊された。
- ・SDGsは調和のとれた正三角形に戻せと言っている。



- ・SDGsは「環境をどう守るかではなく、経済と社会をどういった形に持っていくのか」、「誰も置き去りにしない」というインクルーシブな社会が競争社会で実現可能か」を問うている。

- ・その一つのヒントが江戸なのかもしれない。

●私たちの知る唯一つの「持続可能な社会」

- ・いのちのチェーン（リング）を受け取った今の私たちがどうやって次の世代につなげていくのか。

●「鵜養」江戸時代から餓死者のいない村

- ・村は森を33箇所管理しておりその森が村の1年分のエネルギーとなる。1年目に切った森が34年目には元に戻っている。持続的に森を利用してきた。

- ・生きていくために必要な全てのもの（塩除く）を山から得ていた。

- ・どのぐらいの自然があり、どんな木が生えていて、どのぐらいの広さがあれば、どのぐらいの人間が生きていけるのかという感覚は縄文時代からあった。

- ・こうした概念が「里山」

●幸せの経済

- ・共通財が自然の中にあり、人と人との関係性がつくりだす社会。お金は必要なかった。

- ・一人では生きていけないため、人と人とのつながりが重要だった。

●外部経済から内部循環経済

- ・地域がどんなにお金を稼いでも、お金が地域の外へ出て行ってしまったら地域は豊かにならない。

- ・地域の中でお金が循環する仕組みを作らないとそこに雇用を生むことができない。

- ・生活の基礎を地域で自給しようと考えなくなった。全て国がやってくれる。生活の基礎を外に依存している。

- ・特にエネルギー費の割合は大きい。

●里山資本主義

- ・エネルギー費として外に出ていくお金をどうやって地域内で循環させるか。

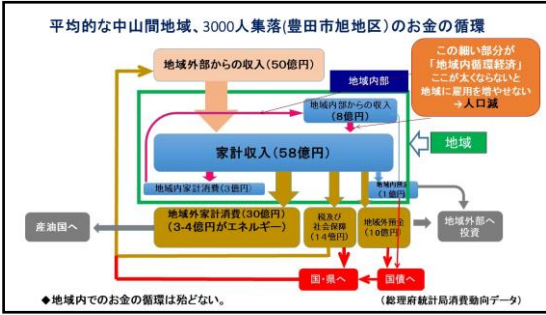
- ・地域で消費するもの（お米、木材など）の値段を自分たちで決めるという動きも広がっている。

- ・岡山県真庭市は山の中の地域にあり、山を自分たちのエネルギーに変えられないかというところが出発点。

私たちの知る唯一つの「持続可能な社会」
それは、「先祖」から続く、今の「あなた」



- 山村の暮らし
生きるすべてを自然から調達
- ◎ 豊かで清涼な水
 - ◎ 田畑に入れる肥料
 - ◎ 牛や馬に食べさせる飼料や糞料
 - ◎ 日々の煮炊きや暖房に使う薪や炭(燃料)
 - ◎ ヒエやソバなどの食糧(焼畑、循環利用)
 - ◎ クリやチなどの木の果(主食として扱われた地域も見られる)
 - ◎ 山菜やキノコ(保存食)
 - ◎ 建材や屋根を葺くための茅(建材)、護岸を補強する(土木材)粗朶(そだ)や柴
 - ◎ 罾籠やロープになる藁や葛
 - ◎ 衣服の糸となるフジ、クズ、イラクサ(繊維)
 - ◎ 紙を造るためのミズタ(繊維)
 - ◎ 農具や生活用具
 - ◎ 商品になる和紙や木工品(現金収入)
 - ◎ 薬になる草(キハダ、ウミズガクラ、オトギリソウなど…薬)
 - ◎ 現金や食料となるクマやシカなどの哺乳動物、魚や鳥やサンショウウオ

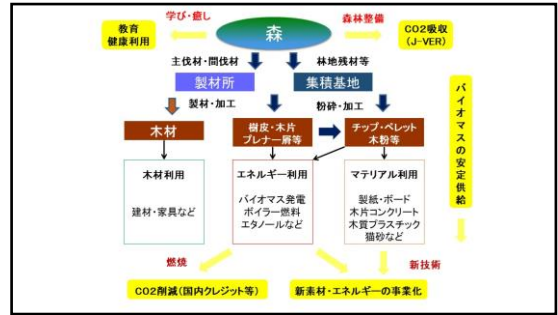


岡山県真庭市の「里山資本主義」

人口約44,000人 (東京23区の1/220)
面積828.43平方キロ (東京23区の1.3倍)
一林業・商業・工業
(森林率81%, うち人工林率61%)

○平成18年「バイオスタウン」認定
○菅谷浩介氏とNHK取材班
○「里山資本主義ー日本経済は安心の原理で動くー」
○「真庭バイオマス発電所」(1万キロワット)稼働
CLT (Cross Laminated Timber) も本格化

- ・当初、森は製材所で製材し出荷されており、そこから発生する端材などをお金に換えられないかという依頼。
- ・エネルギー利用やマテリアル利用の仕組みを作ったが木材はコンスタントに製材されないためすぐに破綻した。
- ・そこで地域で発生する全ての木質（木材）を買い取る仕組み（集積基地）を作った。
- ・結果、地域で消費するエネルギーの約3分の1を自給するようになった。



- ・例えば、薪ストーブに火をつける場合、多くの人の協力が必要であるため木材は使いづらい。
- ・木材利用を地域の中で実施するためには価格や実施を決める（人間関係をもう一度作り直す。）必要がある。
- ・これが里山資本主義の本質であると気付いた。

●小さな里山資本主義

- ・岡山県真庭市中和地区
- ・温浴施設に薪ボイラを導入したがその活用にはボイラに投入できる形に薪を加工し、運ぶ人が必要。
- ・お金の地域循環が大きな成果ではなく、昔のような協調する仕組みができたことが一番の成果。
- ・現代では「関係性」はお金に換算できないため注目してこなかった。
- ・SDGsの実現のためにはこの「関係性」がいかに重要であるか里山資本主義の実践によって分かった。
- ・これからの未来のヒントになる。

●皆がさがす、幸せな社会とは何なのか

- ・地域が有名になり、人やお金が集まることだと思っている首長が多くいる。
- ・地域医療や福祉に携わるお医者さんは支えあうことが重要だと回答する方が多い。
- ・「自分が人の役に立っていると思える社会」＝「幸せ」

●これからの社会

- ・人と人が関係性を作りながら生きていく社会
- ・お互いが持つ弱みを許容する社会を作らないと誰も取り残さない社会を作ることはいできない。
- ・環境問題は「心」の問題
- ・人と人が協力して生きてきたこと、これがかつては日本という国の形だった。

木質バイオマスの学び

- ・木は、かさ張る、汚い、重い(煩わしい) → 地域内消費がベスト
- ・ボイラー選定などの利用方法より → 収集・運搬システムが重要
(誰が、いつ、いくらで、どのように…地域で決定、地域の自治)
- ・地域内の連携が不可欠 → エネルギー・素材事業のように見えて、
内実は、**地域づくり事業(関係性作り)**
- ・地域の経済効果 (内部循環型経済とは関係性回復経済)
外からお金を持つてくるか (バイオマスツアー、観光、商品開発…)
外にお金を出さないか (バイオマスエネルギー利用、教育…)



8. 地域で皆が食べていける
(食糧・エネルギー・福祉の生産・交換・贈与・連携・購入)
9. 子供たちが地元で遊んでくれる。若い世代が育つ、住みつく。
10. 地域で生きる誇りを持てる。
11. 死ぬまでここで生きていきたいと思う。
12. 農作業・山仕事ができる(精神的、肉体的、最善の健康法)
13. 神々・祖霊・産土…と、いつも一緒と感じられる。
14. 自分が人の役に立っていると思える(ex.産直、贈与の広場)
(地域住民の視点・個人の視点)

(現在～これからの20年)
「生きる意味を問う労働」
(meaning of life)

地に足が付き、コミュニティの中で必要とされ、
自然の中で、その恵みを得ながら、必要最低限のモノを持ち、
多くの人と、世代がつながっている社会を実現する。
お金より共感や協働。共感できなくても、共生(自治)。
Do より Be が大切。働くことは、生きること。
お互いが持つ弱みを許容し、そこから社会づくりを考える…
人生は、「職業選択」ではなく「生き方づくり」

●質疑応答

- ・なぜ、現代の人々は、江戸時代の人々とは違い、何世代も先、何世代も前の人々のことを考えなくなってしまったのか、主な原因があれば知りたい。
- 江戸時代は生きていくことが全てに優先する状況だった。そのため次の世代につなげていくことが自分たちの使命だと思えた。現代は際限なく欲しがるのが欲望を満たしていくという価値観に変わった。これを見直さないと江戸時代の仕組みなどを利用することは難しい。欲をどうコントロールするのかという時代に入っているのかもしれない。
- ・昔の暮らしのほうが環境的に良いと思うが一方で「前に戻るのはよくない」という意見が出る。お互いの価値観の中で中間点を見つけるためにどのような方向性の知識を身に着ければよいか。
- Z世代に期待している。社会の役に立ちたい、モノはこれで十分、という意識が今の若い世代には確実にある。私たちは「科学技術や経済のようにずっと発展していく時間」と「木や農業のような循環していく時間」ふたつの時間を持っている。先祖が考えてきた持続可能な社会は循環の系の中に自分たちの暮らしをどう当てはめるのかということ。文化と文明をどう両立させるのかそのバランスをつくっていくことが調和。調和の真ん中にあるのが人への思いやり、相手に対する心、つまり「愛」。システムだけで未来の社会を考えることはできないため「愛」が豊かな社会をどうつくっていくのかを考えていかなければならない。若い方にはみんなのために生きていきたいという「愛」を語ってほしい。そんな中で社会が見えてくると期待している。
- ・里山資本主義を実践することにより、その地域の里山・生態系・環境などへどのような影響があるか。
- 人間が生活の中で利用してきた森を里山と定義した場合、山に光が入る。日本の森は生態系豊かな森でそれを色々な形で利用してきたのが日本の文化。多様性の維持には光が必要であるため森を利用しないと維持できない。森の視点では里山資本主義によって生物多様性や生長力が担保された生態系が出来上がる。経済の仕組みを使いながら循環の仕組みを復元しようとしている試みが里山資本主義。
- ・首都圏の中で里山資本主義を実現する、あるいは都会に住んでいる人は何をすればよいか。
- 例えばお米はスーパーやネットで買うようになり生産者と接点を持つことは過去と比べ遥かに楽になった。まずは生産者との接点を持つことから始めて自分の命がどこに繋がっていくかを確認する。それにより、生産者の人となりとその周囲の自然に関心を持ち、運命共同体のような関係をつくる。世田谷区は40年前に群馬県川場村とふるさと協定を結び現在では川場村の生産物のほとんどは世田谷区で消費されている。都市と地域でもお互いがそれぞれの良さを分かち合いながら一緒に子どもを育てていくことができる。こうした取り組みを楽しみとする時代になると良いと思う。
- ・先生は人づくりに関して何を大切にされているか
- 私たちのからだは私たちだけのものではない。私たちのからだは調和された状態。どこからが自分でどこからが相手かという境目は生物学的にはないと思っている。みんなが多様なことをやる一方で根元の部分でつながっている、そんな社会が「愛」ある社会のベースだと思っている。自分だけではなく、自分が必要とされていないわけではなく、その全てにつながっているという自信とそのつながっているつながぎをどうやってこれから育てていけるか、そんな夢を持ちながらぜひ、社会、世の中と接点を持っていただけたらありがたい。